

ある庭園での三つの思ひ出

枝垂れ桜

庭園に入ると すぐの所は広場になつてゐる
中央には枝垂れ桜の大木が立つてゐる
僕はこの大木の花盛りを見たことがない
庭園内にはおだんごを食べさせてくれる場所がある
池を眺めながらつまむのを たのしいこととして いつもさうしてゐる
庭園を一周して帰りがけには同じ場所に来て夕闇の迫る中でゆっくりと大木を見上げる
その日の天候によつて また季節によつて 枝垂れ桜の枝のゆれや緑の葉も変貌する
あれは夏の日のことだつた
おだんご売店の少女が 店を閉めての帰りがけであらう
大木を見上げてゐる僕のすぐ側をいそいそと通りすぎた
おとなしさうな白い顔が ふとふりむいて僕に言つた
「春に花が咲いてゐる時には きれいですよ」
僕はするどい声を耳にしてどぎまぎした
何回も僕は庭園に来てゐる
どういふわけか枝垂れ桜の満開の花といふものを見てゐない
おだんごを食べながら椅子に坐り池を眺めることは欠かしたことがない
あの時の少女であらう お茶を運んで来てくれる
その後は 言葉を交すこともなく
年月が過ぎてゐる 僕は心の中でつぶやく
「美しい満開の時にめぐりあふことがなくてすみません」
僕の耳にはあの時のほりのある声がひびいてゐるのだ
さらにそつと小さい声で僕はつぶやく
「あなたのことは覚えてゐますよ
ふりかへつて言葉をかけてくれたことは忘れません」

雪の朝

僕がまだ学生服を着てゐた頃だから六十年もたつてゐるわけである
前夜降雪があつて庭園は純白であつた
池の水の青さがするどく際立ってゐた
それを背景にして目の高さに
小さな白い包みが枝の先にぶら下つてかすかにゆれてゐるのが見えた
「小鳥ではないし 毛虫でもない」
近づいて僕はそれが何であるか気付いて目をそむけた
枝には小さい短冊も結ばれてゐた

「さきほど彼女と ちょっと つけました」

裏側に

「ゴメンナサイ」とあった

戦時中はその場所は 高射砲の陣地になつてしまつた

不思議だと思ふのだが

一面の雪なのにどういふ風にしたので可能だつたのか

御殿女中と若侍のもつれる姿とか

桜姫と清玄のからみとか

いろいろに考へて

不愉快な思ひ出にはなつてゐない

入園に際して

庭園の入口には看板が出てゐた

「六十五歳以上の方は入園無料です」

僕は受付で川崎市発行の「寿」(コトブキカード)を呈示した

そこには「入園料二百円」と書いてあつた

「すみません お庭を見せていただきます」

受付にゐた中年の小太りの女がつめたく言つた

「これには生年月日が書いてありませんね

それを証明するものがないと」

定期券 名刺 と考へたが残念ながら僕にはその要求に応じることが出来ない

「保険証でも持つて歩いてないといけないんだな」

つぶやいて僕は困つて立ちすくんだ

「今日のところはいいですから これからは証明するものが必要です」

「すみません」

と言つて庭園の砂利を二三步踏んで僕はひき返した

「お情けで入れてもらふのはいやですから料金を払ひます」

僕は銀貨を二枚指につまんでゐた

すると別のガラス窓が開いて 若いずつときれいな女の人が顔を出した

「いいんです どうぞおはより下さい」

小さい声でさらに言つた

「これでおはよりになれるのですよ」

それならばと足を早めて池に向かつた

どうしてかういふことになつたかを歩きながら考へた

僕の帯同してゐた女が池の方で微笑をうかべて僕を待つてゐる

「ああ さうか」

年の若いいい女をつれてゐるジジイを憎んだわけなのだ

とにかく僕は女を待たしてゐることの方に気が向いた

「何かありましたの」

「いやなんでもない」

その時になつて心は年齢についてしづかにからみはじめた

社会的な関係を持つてみた頃なら 僕は戦闘的に対応して 論戦をはじめたかもしれない
八十歳をこえてゐる人間が どうして 自分の年齢を 書面で つまり役所の証明でなければいけないのか

僕自身はここに存在してゐるのに 十五年もの年齢差を書面で呈示しなければならないのか

女は言つた

「何を考へてゐらつしやるの あら つつじがきれいだわ」

「いや 何んでもない ゴオゴリの生きてゐた国にはつつじが咲いてゐるかどうかと思つてね」

快感

ソノ時ヲスギルトキ 快感ハ

ユツクリト アタタカイ

ハゲシサハ ドコカニトケテ

フタタビハ コナイト オモハセテサル